

* 門にて(1-12 節)

ボアズはそこに自分より優先される買い戻しの親戚を呼び、町の長老たちを 10 人呼んで、公式の法廷を準備しました。そこで多くの証人の前でボアズは土地を買い戻す権利もらい、ルツとの結婚を宣言しました。そしてボアズの宣言を聞いて、町の人たちが祝福したことが 11-12 節に書かれています。ボアズもルツも町の人たちに愛されていたということが分かります。

* その後(13-15 節)

2 人は晴れて結婚することができました。跡継ぎとなる男の子が生まれたと短く書かれています。

そしてその子は主が与えてくださった子だということも記しています。ベツレヘムに戻ってきたとき苦しみの中にあったナオミ。けれども神様が彼女を慰めてくださいました。

* 歴史の中に働く神(15-22 節)

ルツ記は最後系図で終わっています。系図が記されている理由は、聖書を読む人たちに「歴史の中に神様が確かに働かれていた。」ってことを伝えるためです。歴史をつかさどる神様がその計画の中にあっては彼らを愛しておられ、その背後で常に働かれていた。神様はルツたちと共におられました。この神様は、歴史の中のほんの一部の私たち、系図があつたら見過ごしてしまいそうな小さな私さえを愛し、私の人生に介入してくださる。愛を持って関わってくださっている神であると聖書は示しています。ルツ記の全体のテーマは「主に信頼する者の祝福」でした。歴史の主が私たちと共にいてくださる、この祝福が私たちに与えられています。

* 主がとともに

聖書に記されていませんがルツたちはこの後も生きています。だから試練や困難があつたり思い悩んだりすることもあつたと思います。でも彼女たちは、変わらずに主に信頼して生きていたことでしょう。天の御国に入る日まで私たちの地上の旅は続いていきます。それまでにいろんなことが起こります。いろんなところを通ります。でも一時のことに心捉われて右往左往したり早々と結論を出したりしないようにしたいと思います。今も私の人生に働かれている主が私と共にいてくださることに希望を持って、幸せな時も苦しい時も主を見上げていきたいと願います。日々の生活の中で神様がともにいてくださる祝福をもっと味わっていきたい。神様との祝福の関係の中に入れられていることをもっと喜びたいと願います。神様とともに歩んでいきましょう。主がともなつてくださる人生こそ祝福された人生です。